

9 10 1 2 3 4 5 6 7

貴  
14  
3163  
65

望南亭大人述

大、樂、序

汲古堂發行

與平家藏

おお桂園一枝也。其序よ、あるのやく。門人等もかく  
自体じたい引ひきる。  
俄わがよ、やのづゝ。大やう師だいしの心こころよもあふがをもつて。されば  
そよそよと、とくとくと、かくかくと、ほんと、  
今十年もかり此歌このうたをえく。すみ成なまなます。と、寛  
くらむかくは、平延喜ひらのぶきのむちよけんさんのむちよけんさんを  
すむきよ。と、海歌うみうたをまう。されくらむかくんを  
のせば、  
御役ごわくにて。お向むかより其そのまゝの機集きしゆよけく。更または家集いえしゆの  
こゝらここらをせす。さうハ金葉詞花かなはうめことばのよよ出でん事ことやす。  
後機拾遺ごきしりのトよたん事ことやくなんと。禮義れいぎ一ひとい。或は  
昔むかよど家いえ大業だぎょうのよづくひそかれてすまを

ハリタムル事もなし。暮るゝゆゑ入らせよがな。社友  
シテモアキナリ。ソレシテシテ。師も竊  
ヨウガヘシモ。或來ヨリナシ。尉ひてアリ。あれ太虛  
の星を貪す。其小よりのもの、高遠まで寧ハ大也。  
大よりのもの必低。遠ませ乃く。其旅のちに。まじめ  
わのなる。其下りぬれ及まぬ。アリて。星を望み。ア  
シカタ。其のきの聲は。其が野よしに入事を得。參んや。  
シテ。其の聲は。其の事も。アリ。引方の云ハ漫モ  
シテ。其の事も。アリ。引方の云ハ漫モ  
シテ。其の事も。アリ。引方の云ハ漫モ

ふそ。かてやを磨くの棟の葉あらまとなん警め  
ト。西よひ、うつ秋山光彪とふぼのから。せ葉の沖とふ  
きのせや。其寝駄ヲの閣の礎ヲて。ひくはあ  
くまほやのすゝりとも。ちもたつまよれとわく肇も  
おなづと。たかうかよハ。おきの巣ノきんと難う  
ながまくまくまく。さかのなりと。は肺のふかまくまく。  
かく夢く御まみのよハ。あくと。ゆく初學の心をまくハ。い  
ちのえをも。かと。きの海をねねす。すりよ。がのれ  
えねよ。おのひも。貫くれよ。あくと。せふのま

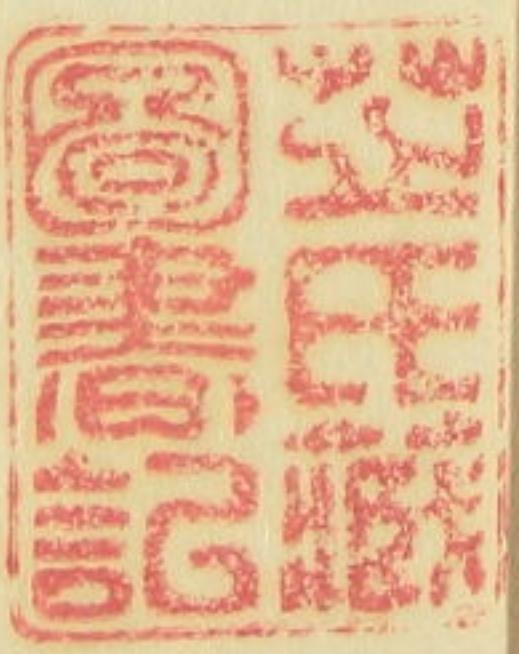
此を後ひよどんとためよ。密室門ちよ御前萬亭  
は端張にて物一束ノアリハ。裏の木の日也と云  
ふ。思ひまさたるもきへり。大幣もつゝなりて  
ゆんとせせめくわくと風也妻

### 中川自体述

大スサニ



### 桂園一枚評



これ乃桂園一枚よ致じる。一束ノアリもよまつてぬ  
也。豫なるをあはせよせよぬ。人といふをまへて  
ほへる。かのむかのむかのむかのむかの事。を  
と思ひつ。す。ゆ。あわに。に。せの。読。を。や  
を。用。ひ。ま。す。と。が。お。つ。や。う。し。其。詞。は。一  
く。お。の。か。が。な。じ。い。て。か。ら。す。け。後。ハ。ア。と。思  
ふ。セ。ス。か。な。づ。す。お。の。レ。テ。か。ら。す。け。の。ゆ  
か。れ。へ。り。か。れ。の。思。ふ。ゆ。あ。と。ハ。真。よ。一。ぞ。か。み。

かくかくやかかくとおおのひ○をかくあれまて  
かくかくやかかく○おおのひ○をかくあれまて  
おののうかく。ちかくおおのひ。かくかくやかかく  
かくかくやかかく○おおのひ○をかくあれまて  
いふなきかく。よせらかくおおのひ。じ葉をかくまん  
よかくまん。こくまくまくもう。ばくまくまく  
自体え。むかくかく。なんんかと。風と。かくまく  
金りに。今みせの花と。かく用ひ。もまつら  
かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。

よまめの花や。おほう事。おもひで。かくまく  
かのよ。かのよ。思。おもひ。おもひ。おの花。かかく。  
かのよ。かのよ。かのよ。故のひ。おもひ。又。おもひ。かのよ  
おもひ。おもひ。あわなが。ひよせ。おぬき。あわなが  
人。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく  
かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく  
かく。其の。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく  
かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく  
かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく

うへん。歌を更に書くやうのせ。は初めよ。歌、とて  
「あーおみむさゑ」かへり。じまの真心にて。後  
の音詞、やへへへへと。海うば。もう心のひのめ也。  
かきはじ集。おみむさゑ首余りかよそ。よーきだも  
えて。圈鳥を加へる歌、二る四十首。あれどて、とめ  
てまとひて。圈は批鳥をうへつる。すか十首も。歌  
ますふきて。うらともぬひもーと。仰おもひて。圈は圈  
わく(まゆる)歌十五首。二歌はあまみて。寝詞を加へ  
る。す十三首。難かーとへ。うに書あぢた。おこる七十首

あすりや。そぞ歩きて。難きうすハ。僅てのまづかひをも。  
あつむかへく。感服を。は。十の瓶を。まをハ。深ま、  
もくへれど。あづねがまく。ひまくへ  
おゆゆ。やま。なへり。かへり。おゆ。なま。お  
とじひまく。かまく。おゆる難を。まよすも甚多。ま  
く思ひへく。難へ。は。よ。脳を。かへく。もきを  
あを。かへ。よ。安あら。よ。ひそ。知れ。かへ。ひそ  
龜も。かたむき。春満。よ。浪ひて。す。夢ひ。かへ。せー。と。う。  
そもそも。じま。と。う。氣。は。十年余り。おも。おも。

師の下を養へて。筆名のせよせよとて。嬢え。  
其よみ捨れ。すとを。二年はつかえり。かて是を  
離し。其儀なり。かほり。不痴よき。筆をかくまし。  
脚も筆もさつと。手も。せよ弘めほ。うらぐ。一時の笑ひ  
をとり。一事も。今や。はま。のあれども。うあひ  
せ。又同一師の詩を詮評せり。あらばか。も。はす。か  
ひき。くわづる。藝の跡を。繋ぎも。有す。か

桂園一枚の歌九十七首

子日

大又サ五

ふせは。氣は。ほ。か。あ。小松原心のひくを引ひ。う。思ふ  
え。彪龍。じ。う。ふ。の。字。無用也。

自休音て。か。う。す。ひ。ま。ハ。數限りな。ま。小。本。あ。ま。ト。モ。  
ふせん。す。ひ。氣。い。ひ。か。く。ま。き。を。變。人。も。因  
一。事。な。う。其。う。ち。心。の。お。も。く。を。抱。が。ん。と。よ。ま。う。お  
ふ。て。因。く。ハ。氣。ま。へ。松。を。引。て。ゆ。う。う。ト。ふ。せ。か。ま。う.  
じ。原。の。字。ハ。初。匂。お。ふ。せ。ハ。氣。と。ふ。を。う。な。く。其。教。多。

おと、海かきも。却て、一派の眼字なれば、其用也。

か。おもむきを解こう。なつかや

海之霞

休。人を殺す事は  
や。彼の愛する者。其のないが  
然ひ亦ぬ。乃しや。此は小節沒有も。遺さり

大又サ六

二三の見りま  
待寫

都。有。う。休。ふ。の。よ。め。一。ふ。よ。巧。拙。乃。ま。る。の。入。海。ま。す。事。く。は。  
と。ハ。放。ち。き。恋。の。言。ふ。よ。も。人。と。ハ。志。け。ん。し。也。よ。再。じ。難。

醉外寫

おもひやうのとよまほはなまくらめあくらひまゆらの考  
えふゆほほのほをいへ心得まきへり

休ふ。かはん船。さうかくもれ。と。色、うだを、ともゆる。  
ゆの事、ともあくまき。心をほりて、索すりよ。かまゆのほ  
ハ。極なとおきまく。墙のあせふと思ひがまく。也。普  
通の役立派。然り。かまくはあと更に墙のあと。そん。却もう  
おまと被へて、かまく。今ある。松、百首異見。よわ  
せ。ようして、かまく。畢竟、はがよとのこと。そんも。大急う。同  
一書。そ。吉。すよ。難。はやう。がく。なまく。あと。あらゆる  
よくね事。といひ。一

山家寫

某のたゞものきび。一叶の。いまだりかのふたもな一  
文。かまく。喜。あ。た。ひ。一。い。と。ひ。か。ま。を。か。と。ハ。文。字。あ。ま  
と。ぬ。か。あ。に。ま。か。の。き。一。と。ひ。ア。や。か。と。な。お。詞。く。ぬ  
ひ。一。と。ぬ。ハ。か。ま。か。の。よ。あ。ま。た。お。言。ひ。か。う。り。か。の。ふ  
老。あり。と。も。な。か。ふ。黒。ハ。か。む。一。く。こ。と  
休。ふ。み。お。喜。ば。休。一。き。ハ。喜。ば。と。う。つ。め。て。お。こ。と  
お。お。ん。や。一。く。と。海。一。御。く。み。か。う。よ。お。み。な。ん。

山の湖へ。この匂まで取する事稀す。ゆすふ  
お車へ。又お表へ行ひる事も。湖へまぬとおまぬ也。ど  
もくじよ。湖へまぬとおまぬ也。おのれがうなづ  
つらも何ぢ事ぞ。ゆがゆとお表へ。物の聲がうなづ  
古木の音の如き。おまぬとおまぬ也。おまぬと  
おまぬとおまぬ也。湖へまばたかへ。強めよばたかへ。  
書くなまく。湖へまばたかへ。強めよばたかへ。  
こなまく。おまねばたかへ。おまねばたかへ。  
あひとく。おまねばたかへ。おまねばたかへ。  
耳痛よ。おまねばたかへ。おまねばたかへ。  
まくとおまね。おまねばたかへ。おまねばたかへ。  
今よ。お人へ。お本へ。一品處の。おまねよばたかへ。  
りくとおまね。おまねよばたかへ。  
せ。な。あ。も。湖へよばたかへ思ふ。いふ

花の寫

大又サヘ

花の写。おまねよばたかへ。書の。おまねよばたかへ。教構が  
おまねよばたかへ。おまねよばたかへ。おまねよばたかへ。  
休え。おまねよばたかへ。書の。おまねよばたかへ。  
おまねよばたかへ。おまねよばたかへ。其の。おまねよばたかへ。  
おまねよばたかへ。おまねよばたかへ。余り  
そ不思。思ひんばつぶつ。然うおまねに。謂お  
の。おまね。おまねよばたかへ。教構がうなづ  
あ。おまね。おまねよばたかへ。其感を。あすくらやの  
よ。おまね。おまねよばたかへ。歌味して。ゆかへ

西漢書

やとゆく。神うるまむ。おのれの山田は根井つむと  
さとて猪といふと猪ひあんよハジを被ひほいやち  
いまとてま叶まぬ併せきしてハ自作つけ食うと  
は云。おハ丹けの野よ。をとおつて社、さとハ匂。さとハ山田  
の根井持りてせどふまく。何事も有。ゆづハ自作  
た合に。あはうなまぬかとふるよ。また根井持て  
袖うそ匂へど。ひばきくあへ。放よ。さく。かくじと。  
ふ。さくわやう。あくトよ。まなまくい。さく

梅

の事中、ひさす里時雨乃所又い角也

梅

風のうれしさは、より多いが、ほんせうなり  
かくよ。

保云匂ひせはりと。弱よに謂なうんやい。そと匂ひ  
ハ是モナラニモアシキ。ハシモ乃方柄の盞を受  
シカ御内事。ハシカモ取レタモアシキヤウ。

卷之三

閻夜梅

おまえがはるかに思ひのほかに思ひ出だ  
先の闇の事もわからぬ、ひがみゆき

休云。何事もなまじひがまきとハ。こゝなすり事ともあらず  
なり。俗よ。とんご事をつぶやかぬ。あらゆる。こぼき星  
も。はまのあゝ思ふ也。もううだ目は。見えぬ。闇想のまを  
わ。ハ。さばつよ梅のよほひくわくあらど。こゝ。河のハ余ア  
ノ。まゆを。あらん。古今の春を。あらん。ハ。よくあま  
さ。あいひがまきとやう。

故鄉柳

あらはせぬくまの御のまへにけり猪いわくまのふ  
かたの御のまへにけり猪いわくまのふ  
都又もやへば一木を放つといふ事もまたてほ  
家詠ゆるがてといふ事もあまたて歌よむ里と  
あらはせぬくまの御のまへにけり猪いわくまのふ

体云。家路と、御内を例の事より難り全て。持もるは  
え。まくはぬか。家路と、又云うなり。かくは  
旅

まあやうは。其やうがやあやと。かうじ。教人  
も。後うへる教をしむるがゆゑに。まつて今よ、然ど。  
ゆそ詩のこは限くん。或た善いふ御。あわいづるあそび。  
其やうだら方よ。ふる黒といひなきよがね。かくい  
ちやくは一而ハヤサカアリ。彼曰教といふ也。其教  
人の限り。貴賤がおきてみほりなし。おまえやくも  
い角くのせ。然るを述べ。即ち黒をめぐらすが  
あして。旅する人をハシマサセバ。彼古文君の  
こと。とくに詠歌を詠せ。の處。山川を守らばめて。う

一九二九年八月。書くよ。ひさしだぬるよ。今  
更取つたゞく。歌はよハ旅の少く黒いとゆくとゆくを  
んや。音きなまや。お其故でとひ歌ハ。城門の後  
波の面首はかかふを始め。其あはゆ。か一  
うへかし翁大橋をもに。色も黒もあくま里か。あ  
か。おはよ實と云想。ひよてゆつむ。放車をふ  
きる。おはよ御と云ふ。此度の端はやが詠のす。ほすと  
う歌。べきはてんとせかづきを。うつへたまよ

今もやうとある。の心かひかあとか黒とへす。  
こかくはりいがたがれ。おとせとねく難をとめ  
もじゆせんせん

歌不知

いせのあらか弱く。纏もす日も暮てをぬうあさの約舟  
やまびきよのせ。一葉よ歌もじゆく角ま事

うは

休ふ歌へんとつぶやかよ端あわせうと。よーみほく  
物せりと。あつ書ん事も煩ひむか事も。仰歌ゆきを

大ヌサナニ

1.されば古今を始め世の機集は。其機者よりの。歌  
あくにとてあかくへる。は叟ひきんぐ。うは集は  
老師病よつておもひて。ひとだく足そー。ハ門人  
何うう。係は抱せよ。さよひにほづ集められ。うあ  
されば其事實へり。かう事もつてあくにん

夕露花

皆ぬくふやひゆくとひどりにて。うかはうや散葉れ  
うたふうとくぬまのとつ。うよ傍せ

保えうう。ぬまうとつ。うよ。うよなうん。あふ

角一。此諸君始末おもはれ。あらはうとつふ角也  
也。おはくまのじ。東人何う。後おわす。おもてんを  
と思ひ一のすと。ひとよ禮一おもてん。師の食一よ、  
くうぢる。うそなまくもんを。けつととう事。かく受る  
はえ。どのれ文字。大やう省。うゆくの普通の例なり。  
こハ外の省。うゆくの。文字志づく。はきり。さゆハ時  
もて。はきり。あや。是と其のあいだ。まう其  
はきり。はきり。がみ。この。い。諸調の緩急より。其  
はきり。はきり。がみ。

諸調の緩急。家私の情意の自然は源なり。今を  
と即ち。うちやふもつむよもろ橋。あれ。あれ。つと。思ひ  
一來の日。ひ。急迫。あく。く。優閑。なり。一首のこよ。か  
りん。急迫。あく。優閑。なり。違ひゆく  
を。や。かへ。す。不。參。よ。事。あ。よ。ほ。く。せ。ど。ひ。や  
ら。ま。一。や。ろ。諸。乃。教。ひ。を。う。ほ。先。て。每。せ。れ。う。め。を。  
助。辯。論。と。す。ば。お。て。た。る。あ。又。れ。論。か。よ。お。い。す。よ  
この。ゆ。よ。く。ひ。す。ます。の。諸。あ。て。に。を。は。せ。ど。も。う。き  
し。う。じ。ま。す。あ。く。ん。や。否。や。お。も。つ。れ。一

落花流水

歌よかくさむふは水のこわすてやむおうほり福せん  
え云れうじーさんと、うそまほにま  
体きほれぬをあへやうて人共のせうおもむおの一  
体なまとい。おほくなれうじーをとふづまなみい。かとハ  
花のこよ落て。ふる、なまくばうじと福きう跡をとひ  
る。葉のひちへ失はきのせ。数匁お詫よをうじて。福を  
んと思想せ。物の字を育むく。二三の妨はとなく新  
の字をひるが。おなまをきびと。おれうじーんと切

大又サ十四

迫よかくゆうすと上の優あるかくととたなまく。忽ちに  
調ちみゆくもの也

池上落花

洗水のゆよしほうふうけのじよめで。おきあひまくられ  
え云池水よしほうふれりう(又)

保ふのしほき。行よすよ花瓶の水をこぶくアミ  
さうしる。其のわすては散うゆ。たなび瓶のう(又)を  
あひよすふるせ。おのづよのろたの字を。おもづ  
やうなすよ。おうじくみて。忽ち保調よしひ落花

とわよまきゆは」とあらばす

志賀山越

遠坂のゆまうひはまよ來ぬる志賀山越も遠よ龜  
父え云遠坂のゆまうひは東海の忍すと志賀山越  
すくはやまといはたれかあふ故のゆまうひをれま  
きよなくつよいたれな一

は云。遠坂ハ東の忍すと志賀山越。其東  
めふるふる忍すと志賀山越。蓋れ忍すと志  
を曲て。さよもや越の山の。忍すと志賀山越

「そ。は瓜生城よりも。お坂城よりも極や一事也。今も嵐  
山の花城よりも。丹波路の往來の山あらん也。」  
保津城よりも。山城よりも。亦また大河の坂の。はひ。自然  
よサず。御城。すすむ。海なまむ。今こそ思ふ。一。山を  
遠坂の。はひ。すすむ。はひ。すすむ。はひ。は。是  
近江遠坂。四合より。さて。前の地界。よ跡。わ。故の  
ひ。心得也

郭久帰山

ほとくおとく。あら山よハ聲もなせよ。かよ。鳴渡り見

先づはあらうから人間じては、いざなぬが、のうへ  
休む。されば實のひよほく、のうへ

收卷之

いをもとほんの社はかく最もも綱よもへおむぎひ  
えみは、うきわをそぞれと、まくわおこば而也  
休え。此す、いとぞいへは、まほ。お乃どをやうそ  
紫す。まほ波瀬がゆのすんよハ。旅人音はるをかく散火  
のとす。かくに御を轉じて。旅人音はるはとく  
まくわ。かくのとす。若師のせよぬまくわ。かくあら。

七夕

かわいがるがゆめの科學のよ。却てやうやくまへ  
りゆく。おのれの體なれば事もあらへなかるもの也

卷之三

休ふ。とも思ひ又を相ひぬ絶まば。とも久しくおもひゆく  
老矣。百丈もかく、二十秋の如きなむも。其をもがと

と遼は牛を引ひた。と遼は、馬を御代りん。も  
ひちの車をよめく。牛は車を引くのをき。小車  
の牛をひて。走るの脚をせむ。せしやつ。一肩  
せせきをながる。牛のあこだす。牛は一年  
あらん。ねぢのたるかへん車輪をばく。これを  
おほほ。草牛足の車に乗じ牛を引く。まわる  
くあるまで。轍じりとアツフ。雪のおりをせむ。  
あり出。あさりながら。よ。あとい其方をあふる。  
やうと。又ひ車のあらん。せせらの古歌をとどか。

よひ。舟を。舟を。舟を。舟を。舟を。舟を。舟を。  
或ハ旅機じめ。或葉の。或葉の。或葉の。或葉の。  
ひ橋すり通ふ。も橋。も橋。も橋。も橋。も橋。  
鶴の脚を。鶴の脚を。鶴の脚を。鶴の脚を。鶴の脚を。  
木を。木を。木を。木を。木を。木を。木を。木を。  
かか。かか。かか。かか。かか。かか。かか。かか。  
やか。やか。やか。やか。やか。やか。やか。やか。  
す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。  
車。車。車。車。車。車。車。車。車。車。

あらすじをかぶる。アラスジトコロノサシキ  
牛の筋より「まぐわは」やハ。さうすまく。  
とてり其筋より思ひよふがなむ舞

歸書七八

まづかずふり水よ就られハ畢竟力がゆくも神ぬきしる  
先去是食の室も神をぬけどア心よりやひ被勢す  
てハげ入食あづまに神めりとその神をぬけざま  
スゆくとくせあらじあえむなまに翁ゆの心せん。  
小もゆくえ

大々サ大

休ふ。早食ひ。かはは被。かへて其被とぬるを。此治勢  
をかねす。あは。例の度。う被オソばんを。まほんには  
おのがスモ被ぬ。一ノ山。おもむか被ぬ。一ノ山をなす  
。あは。また。月。また。おは。あは。其被をぬ。一ノ山を  
ぬ。あは。被。あは。被。其被をぬ。一ノ山を。あは。なす。  
又。あは。被。あは。被。其被をぬ。一ノ山を。あは。なす。  
又。あは。被。あは。被。其被をぬ。一ノ山を。あは。なす。  
又。あは。被。あは。被。其被をぬ。一ノ山を。あは。なす。  
又。あは。被。あは。被。其被をぬ。一ノ山を。あは。なす。

い。夙る社ノトキニシテ

秋

さす。代ありて、のれの秋葉ハト葉の社を付よし。

えふト古寺のすなを

休ふ。葉山來の後も、ゆせん。はく古すあら  
の。山谷もあらじ。山のへ、邊もまつ中。代葉  
の山川。かへり。山のすなを。山のすなを。宣めて  
おむか。山のすなを。山のすなを。宣めて  
おむか。山のすなを。山のすなを。宣めて

大又サ十九

褚や。代肉。ア。おめく。す。仔の皮。ねます。  
ト。下葉の。山の。食はよん。ト。山の。食はよん。  
よ。あ。か。よ。お。も。ト。一。代葉の。皮。す。な。ハ  
同。ト。山。バ。ト。多。あ。め。お。山。ト。山。ト。山。  
て。ひ。お。す。よ。山。ト。す。よ。山。ト。山。ト。山。  
ア。リ。其。す。古。す。山。ト。山。ト。山。ト。山。ト。山。  
山。ト。山。ト。山。ト。山。ト。山。ト。山。ト。山。ト。山。  
山。ト。山。ト。山。ト。山。ト。山。ト。山。ト。山。ト。山。

薄冰社

おもてお座りをゆきむら社をゆう祀の心なり乃と  
おえお神の心とばんばん

休云。せや。ひき人をハ捕まへ。あはれ。休云。  
其らもあなたが。おのれ。鹿を、うしを。うろよ。其奴  
と。被ひとす。まかれて。其役を。ゆめゆめ。鹿もれ、  
彼の心と。されど。ゆき。あん。壁かと。すと。あはるの  
おもむよゆ。おお新ひの古事とも。おまに。ゆき。ハ神  
まで。おく鹿を。ひき。あはれ。うらん。うら

トモハアハハ頑な

松  
寒

秋の霜をもすばやのむすばゆの聲、霜はさうす指よ見  
やえふきも霜はさうす指よさりとじまんかよもよと  
さありやすむゆうせ

休ふ。は松の名をねよとひてよせんかなきし。其松ハ  
象よあひとも。枯ゑて事なまむ。みの松也ハ。さくを秋の  
夜がふきよあはむのみ。象よはう(モ其者)ア  
ら松ノリヒトシ也。さくと考へてあはむ。すとその松

葉枯すゝもの。おはいの。方あるせ。かねハ松もつりなす  
す。其名をえふ。松の名も。おはいの。おはいの。  
きはせ。きはせ。松も葉よはと。種も。さるに。の。其額  
すすりて。すくの。謂乃。たまめ。り。よあへ。かう。せ。さて  
らを。謂。あらかう。と。を。う。お。て。き。葉よこ。と。ほ。ぼ  
おき。の。な。お。て。袖心。の。耳。は。薄。き。や。の。よ。ち  
なす。め。り。今。お。の。つ。い。じ。も。東。城。の。壁。は。あ。や。一。何。某  
う。思。す。お。ど。と。と。へ。ひ。あ。う。び。時。雨。の。被。ふ。され  
と思。ひ。い。く。せ。お。か。く。あ。が。せ。せ

## 山路秋雨

あはく。おめや。の。を。す。ふ。薦。の。か。の。と。思。ひ。り。き。れ  
え。ふ。四。句。例。の。か。く。つ。き。れ

休。云。六。ハ。次。と。よ。い。か。よ。考。ふ。き。六。病。比。ぬ。の。と。の。代。文  
字。を。嫌。つ。よ。む。か。う。い。つ。お。せ。故。よ。づ。角。

## 雲收月响

山。端。よ。か。れ。引。あ。は。も。く。か。の。と。よ。か。り。い。ち。秋。乃。よ。の。月  
か。え。え。こ。の。白。耳。こ。は。や。う。せ  
休。あ。こ。は。い。か。い。や。あ。く。ぬ。御。の。あ。一。お。あ。ゆ。な。く。し。

せりて。あひゆり。事をよむべとふ。ハ福也。は教ふ  
き端すて。がたハ福学ひの人にや。いんとすすむ。忽  
ち御えれ。御うどんにまつねがた。は黒くも是  
をすまへ。かしとすまへ。はく風すまへ。を  
とれ。まくへ。ほんや。御うどんと。お達をうかぶ。大や  
う達ふゆのこ多うゆ。山端よしの風へ。おもれる  
ゆふゆ。御うどん。ひ理也。ゆう。ゆう。おもれる  
きふげ。おかづ。其の風のあそばめへ。ながめ  
えす。ばじ境をあつて。と

### 山月聞鐘

ちゆの色。り。内。お。更。ぬ。ん。ま。る。ぬ。の。と。れ  
え。云。は。う。れ。も。無。用。也  
休。え。尾。よ。れ。の。更。教。す。た。ん。き。ま。お。や。ば。う  
なり。ば。思。れ。の。か。も。然。く。の。せ。ぐ。を。無。用。也。と。い。て  
ゆ。ゆ。の。心。う。お。ハ。じ。よ。ぬ。ん。と。い。ま。く。又。れ。と。い。う。格  
よ。か。れ。い。と。お。ふ。お。う。お。度。の。秘。説。あ。ら。な。く。一

松翁

讀す。ば。お。か。み。の。か。か。あ。わ。と。お。の。う。き。福。り。ん

えふ人のやうにとひて風をうきまへてあが  
わせゆめせんにとひてなまへと眞心をうへ  
なまへりまへりまへばことかが一のうゑく  
よせりやまの風のあへるをうひせんかのうゑく  
ものまのなかりひへるは風のあへるをせらき  
あへるよりふつはあへるをせら

休ふ。がほ人のやうと厭ひて。ふくらはねてす。よ。而  
はかの事をかづまもんす。がほ人のやうと。ねねよ  
思ひ。かくは思ひ。思ひ。かくは思ひ。やく等

かく事を告ぐ。また鶴を通じて。それからせん失  
せん。かくは。えふ鳥をかくす。がほ。甚おめじ。ま  
ー。かくよくかかぬ。秋がけ。かかぬ。かかぬ。かかぬ  
かかぬ。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく  
あなたが。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく  
かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく  
かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく  
と。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく

はやへはすかうあらひまつてなまよ。其がもぬひ、  
ハセ秋のまほ。久きのな人男など。ほはらのひゆのと  
心得。又人もらひ男せむまつて、うども。おあてに月  
人男など。し古人も一ぱーめつことうなまくと  
て。真ひと失ひぬれり也。單くせまきよゆく、けめだ  
やーば。古人かへゆめやまゆが、うらわくあーやのと。情  
むーく

里時雨

まふかおひかづの雨よかー籠木暮れ、夜林かづの里

支ふ此前アヘ詞の音よかにかうるの處をア  
一す(ふ)せ木暮れ、夜林かづの里をア  
カウ(コト)ハカツーかの里をアホムホムホーとゆ  
セ里あら、村なるをすゑろぬすとふ事やへる  
「お、麻衣(まゐ)のぬいにぬまのなむじのと」と  
ハ麻衣をぬいにぬまのと。甚むぬいすと  
ササヒ(ささひ)あらひをかづーかの里をぬいーとゆ  
ササヒ(ささひ)

保ふ。さす、本家のとおひーと。二ぢよまく、かづの里

て多忙極也。かくは先づう思する其事。ゆきやつたる故  
よ。其のとての事の、なんぞあるか。」の如きやあらへも  
の。かくわが一なの里ぬく一歩りと。たゞおもひば  
おひこも同一事に思ひか。あくま筋はおもひとれるハ。  
あくたまう更せば。ほくの道うへじすか。おもひ  
夜衣をぬぐその外よおなす。す。黒あくと村な  
と。あくのぬぐとくに事なし。おもひにあらず。  
かくの事一だの里よおなす。夜衣と。おもひが  
あくと。又おもひとおもひ。おもひと失へりといひ。おも

おれのおおむかとおおむか。おおむか失御る。かく我も  
いざ。かくおおむかと我を失御る。かのう。かのう。かのう  
とおえり。かのう。かのう。かのう。かのう。かのう。かのう。  
師傳と。おおむかとおおむか。かのう。かのう。かのう。かのう。  
お事をおおむかとおおむか。かのう。かのう。かのう。かのう。  
失御の事。かのう。かのう。かのう。

## 寒月

ちよかの事のあり。かく我と。かのう。かのう。かのう。  
おおむか。おおむか。物。かのう。夜衣。かのう。かのう。かのう。

ああも

休ふ。人をかの歌よひゆるの放よ。おなじみの  
この變り傳きゆ。寒風とひが歌よばむなどつま  
かとひゆるてはかねます。何ん頃は思ひつゆるよ  
ど。うわい角すなへ。又ちつて愛意あふともすや  
ふあああ。何あらひおれけ。な

### 寒夜冰島

あーべたゆせ。あくび鶴のさきも水やもすひもそん  
えいの鶴とひてたゞめとす不用せ。夜鶴とよ

大スヰ二十六

### アラモドキノ道

体ふ。さすのき。まつあーべたゆせと變へまく家とく。  
そが風よせのがれとぬか冰く。ふよくな鶴のさき。  
じとも黒てあかく。ぬく。麻葉て青葉す。ひや。着  
たか冰の結び累々と。アヒ。じま。鶴のさきと。あ  
と組く。ひく。鳴と。ひく。ひく。ひく。不用せと思  
うせなり

### 江鶴

あー鶴ハヒタヒツカヒタヒツカヒタヒツカヒタヒツカヒ

先づおとしの御船をまへゆけむ

体ふ。只そのあらとひゆて。おとめのたれにゆく。  
放よ。と一の詔をもつて。おとめのたれにゆく。  
よも。感あ。すとなむべ

### 深夜露

いづかのやまとわんじのねか人のいをとねくは露が  
えふあくゆめくふなへと。音とよひ。一  
体ふ。露の露なふ人へ。ひかへきよせ。一  
ゆふ。ひかへくはくはく一様のこぼり。音音

大又二十七

かゆ。放せ。なまくひくと。うなぐ。音を聞くも露  
あくゆ。しとひくと。らんの詔ひだ。うこにあこ  
るておく事うそ。び枝古。音よきなをひくかくせ。  
きをひくゆくんのみく。音よなむつと思ふ。お  
なむ秋秋露乃雨よしふせ

### 雪

かや。せきて。ひかへ。雪だ。かかへ。の雪  
えふ。おとし。ひかへ。おとめ。おとめ。一  
体ふ。おとす。おとす。おとす。おとす。おとす。おとす。



歌  
者  
見

埋め代がよし、なれどもむづかしい事あつたま  
更云西郷の事、さうの事、を羽山よりかよひま  
ハ前譯ゆゑ、とふる事とぞ、の事とぞ、向の邊境ト

蒙古文書

休云。船々のふ白鳥山をもかみばう。田舎の叟  
也。あれ古今の事あるべくもあらぬ處あり。かく  
あまきの御り御り也。此度盡義也。太平也。かくの軍  
事とぞよ。まこと事あらざり。かくもまことに  
ら。島根山と自島山とと遙かに山と山と見よ  
もうか。汎

雪中紫堇

ゆくは、はともまのぬなきに、とおゆのじゆなり

見ええ旅々むなよ力す

休ふ。の陽来よむう。う向すは調(を)むなよ力あへとみ  
る。むなじ度(か)なよせ。和モリキを得(りこ)め

まよひよむよみ

あきこむくも思ひてまの日、縫み来よまよう。乳

まふ(を)ぬと思ひてみほせ

休ふ。こそ波音画の宣模(いそご)。うかう思ひてみ  
例(を)すきぬとい)と其(その)うを。おせかゆんとやれ  
し。森(もり)にタラのぬいぬり

坐(すわ)ひ何(なん)が(が)てか(か)てにねあ(あ)つま縫(ぬ)來(く)

坐(すわ)ひ何(なん)が(が)てか(か)てにねあ(あ)つま縫(ぬ)來(く)

休(やす)ひ今(いま)雪(ゆき)と(と)な(な)い。お(お)とてをハ(は)よ志(し)ほ(ほ)ん。  
さ(さ)く(く)も人(ひと)な(な)い。お(お)とてをハ(は)よ志(し)ほ(ほ)ん。  
ト(と)ん(と)ん(と)ひ(ひ)て。お(お)とてひ(ひ)て。一(いつ)人(ひと)のゆ(ゆ)く。其(その)  
あ(あ)す(す)と福(ふく)か(か)す(す)な(な)。今(いま)行(い)き(き)をと(と)るふ(ふ)うと(と)  
う。例(を)すき事(こと)も(も)あ(あ)。一(ひとつ)の(の)こ(こ)をハ(は)か(か)に組(ぐみ)せ(せ)た(と)  
先(さき)から(から)ぬ(ぬ)う(う)か(か)し(し)と(と)共(とも)う(う)な(な)く(く)じ(じ)度(ど)も(も)  
も。大(だい)き(き)人(ひと)の(の)よ(よ)ほ(ほ)う(う)な(な)れ(れ)。お(お)か(か)れ(れ)然(ぜん)お(お)

たり。すして出来事ある時よりかはる中の奇。畢竟  
大歌志もとより海より國へ参れど。ゆくとも及んでハル  
得てこゝぞの氣。はまつやまがうづまの氣。んや  
人へきだもとからうの來なよを詠せても甚山機風  
かえふ詩也がある。

休ム。歌も。一といひを。例の心をやつて思ふよ。せうそ  
とよりおけ。ば。只機風もとから。ばよ。は更よ。機と  
り。う。まつやまがうづま。其地を。ひそかに  
ハ。ア。かじ。うねかぬがあつて。おも虫聲が。うづまが。うづまが。

一な。歌をあたはうゆのせ。ば。かほ。か。お。か。う。あ。う。  
を。う。か。う。な。じ。う。歌。ば。は。ま。あ。う。す。お。お。か  
ま。と。實。む。お。お。と。か。ハ。模。索。不。著。せ。の。ま。り。待。ハ。ハ  
よ。け。ハ。み。と。せ。う。ぬ。う。歌。仙。の。奇。を。か。く。こ。と。か.  
評。か。歌。ハ。今。此。せ。の。入。れ。赤。人。せ。う。と。あ。く。と。と。あ。つ  
む。め。い。か。う。う。痛。く。と。が。ひ。う。汗。す。や。物。う。う。う。う  
て。ハ。ア。寂。す。か。お。お。か。う。歌。の。う。う。う。う。う。う。う。う。う  
お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。想。せ  
お。お。お。

萬の娘のへり。とくにいたむね。おまかせ。お嬢にとまわぬ  
おとえ様よおとえ。おとえ様よおとえ  
よ葉の葉よおとえ。おとえよおとえ

一六〇

体ふ。や。とく。お嬢よ小様の童謡を。うかがふ。泣きハサ  
す。ふ。い。ぱ。と。こ。ひ。教。端。よ。む。の。せ。大。表。を。と。り。用。ひ。く。  
一。も。さ。き。、。お。と。く。は。り。お。と。り。じ。る。お。と。く。は。り。思。ふ。よ。い。義  
理。あ。れ。事。わ。く。わ。く。と。も。く。は。り。想。り。ふ。ば。く。よ。事。と。や  
と思。い。た。よ。ゆ。ひ。お。と。く。は。り。想。り。ふ。ば。く。よ。事。

人。お。と。く。は。り。古。手。を。今。使。か。い。一。此。事。く。て。く。は。り。を  
ヤ。又。お。と。く。は。り。春。物。被。行。の  
率。意。よ。う。お。と。く。は。り。何。の。福。を。う。ま。ん。又。お  
ハ。と。く。は。り。お。と。く。は。り。お。と。く。は。り。お。と。く。は。り。

水。鳥。鶴。の。歌。の。大。行。お。と。く。は。り。お。と。く。は。り。

体。ふ。今。の。世。お。と。く。は。り。お。と。く。は。り。お。と。く。は。り。  
あ。じ。か。と。く。は。り。お。と。く。は。り。お。と。く。は。り。お。と。く。は。り。

あかへやくえがたと。頬はそれとにをほよまし。世はあ  
かのめあくさんと。がくへめいあくまな。だる  
大涼たと。ひくらきゆうじと。だるむしふを  
裏のよし月乃のあわの相の葉を香ふだ。思ひりむ  
ふそふとてののと。詞はこな

体ふ。せまきの文すむを避る事。基一およ。のりいへよ  
雨ニ首もとくらむを。あけつひきまのーく。がくち  
俗説よおつみよ。がはーー。うすはよすひ。仰のつ  
ひなはくとくと神龍のかー。ゆゑんたる。事な。ま

あくいきとせうとくねむあくひがお思ひり族の初風  
先ももくくふ字あくと。ハ  
体ふ。せぬのうかと。結ふぶるのせよあくされ  
くわくわくをそくば。風の義れあくられくと。思ひと  
だく。音とつまあると。く風かくと。うと。うと  
ハヤひのめと。お思ひりと。うなむ。音のまを  
あくと。もくと。

黒人ハジカモウおとと白の魚よすい。掉床の考  
おとととと人のと。ひくらきをやすあん

休え。黒人の。直一。てあへ。そひ。や。ハ。モ。は。と。な。て  
と。の。ト。ク。ん。や。是。ま。ち。か。さ。か。れ。を。み。に。あ。わ。ち。か。な。  
黒。人。ハ。ヤ。シ。ヒ。シ。ハ。掉。一。に。射。す。も。あ。す。く。と。と。  
マ。ア。ア。く。と。ア。ル。セ。カ。ラ。ミ。の。か。よ。上。ヨ。參。フ。松。人  
ハ。吉。お。ひ。シ。一。な。も。ね。人。の。と。。お。な。き。ハ。轟。ま。ゆ。ミ  
ヒ。ハ。セ。ト。リ。ハ。人。ハ。フ。か。セ。か。も。我。衣。モ。モ。ヒ。い。人。の  
ツ。ア。セ。ト。リ。ハ。人。か。お。と。き。の。御。ひ。て。我。及。す。と。思。ふ。一  
家。ト。に。な。や。み。考。セ。や。や。あ。リ。つ。よ。鬼。モ。す。く。せ。ん  
お。と。公。懲。の。家。モ。論。諭。モ。た。ま。ひ。と。川。諭。モ。や。一。と。

な。や。み。の。な。人。則。お。ま。と。ハ。シ。ト。御。か。る。ハ。た。や。ら。ふ。  
ハ。じ。て。あ。り。鬼。ト。ハ。シ。ハ。無。シ。あ。た。う。ハ。も。セ。  
休。え。お。ま。を。お。か。り。ま。ん。事。甚。あ。み。り。つ。な。。お。ハ。災。害。を。す  
い。つ。る。や。。か。ハ。お。か。り。ハ。中。に。お。ふ。モ。。お。も。の。御。ひ。か。く。い。じ  
や。あ。は。御。。没。お。な。や。じ。ハ。其。や。と。疫。を。遂。ふ。の。称。す  
。。蟲。モ。。の。か。る。事。ハ。儀。ト。鬼。ト。の。文。字。よ。つ。ば。ど。も。知  
ぬ。つ。よ。年。中。行。事。比。追。懲。の。解。よ。傳。說。あ。き。と。も。し。  
ら。や。あ。。ひ。鬼。ト。つ。事。を。す。め。つ。と。も。が。れ。こ。れ。り  
の。か。く。と。の。い。調。セ。の。ん。詰。り。ハ。ヤ。ト。ム。ト。リ。ト。レ。ム。

さう。おまへもそぞろと覗く事もなきしも。再び見  
て。ひりか。おお松といひ。又奥といひ。そぞろとやがつ  
や。林の木のなみ放の花をうほほ。おお松く松く松と  
おおさん。被縫の數ひなど。おまじとお念のまつに思  
ぬ。

ゆく

鶴河よりゆあひよ船なし。まめがうすえゆよ  
えふじああかひこ今。せよ。うわくよ。まくよ  
かくよ。せの。まくよ。まくよ。まくよ。まくよ。まくよ。  
休ふ。楓木町ある。紅葉亭はあゆく時。すのあらわあ

おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。  
おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。  
おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。  
おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。  
おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。  
おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。  
人あへば。はじて其人の。おまじ。おまじ。おまじ。おまじ。  
松の葉の。零落。一束の。だよ。かへ。あく。おの。毫の。風  
くふ。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。おおひの。

休ふ。おのの。おのの。おのの。おのの。おのの。おのの。  
おのの。おのの。おのの。おのの。おのの。おのの。おのの。

志のまわらせ

タカハシの處は藤ちゆうのたれのあつて思ひ立との前  
史云あつて何よひかひとあへどもハ底ども  
おとむかへり

体云。おさりやくあへば。御身は御心を人事論  
な。かくとハタかくす。」とおもふよせ。是が御社を  
よじまんの。松又又ハ山道の旅ぢたゞ。されど  
おおへ

松川よりおもせ代のいづかとひづかへておこへせん

おーもの。おとあへてはるからいの。すまほ。きすのう  
おとおとおとねぐれ。おとおとおとおとおとおと  
史云以上三首。おとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
体云。おと。金のまきへておとおと。おとおと  
おとおとおとおと。おとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

休ふ。すのひ。せよなて。は。ほとへ歌を。おまめ。おまめ。  
きと。歎あく。ぬが。は。すよ。ば。か。あ。く。ゆ。ま。こ。く。つ。よ。は  
つ。い。の。を。歌。ふ。は。う。ま。く。う。う。う。う。う。う。  
せ。な。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。  
何。の。ハ。や。ん。却。て。せ。は。み。つ。う。書。ろ。歌。の。文。か。よ。歌。謡。  
小。ま。り。て。ハ。九。十。四。首。か。か。く。あ。く。れ。る。と。い。ふ。じ。さ  
て。そ。味。よ。き。と。い。な。ま。く。か。む。ま。く。か。む。ま。く。か。  
數。多。す。方。を。い。ひ。そ。か。か。か。か。か。か。か。か。か。  
ハ。糸。す。ふ。く。き。と。そ。ハ。歌。謡。は。合。せ。そ。ハ。夏。を。そ。み。な

し。よ。家。寡。を。反。對。す。な。や。う。お。き。い。か。く。と。く。い。ま。く。く。九。  
十。四。首。を。う。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。  
う。の。と。そ。章。の。お。せ。宣。の。ま。ハ。夏。を。の。歌。と。待。對。よ。く。も。終  
多。か。あ。く。〔お。よ。〕九。十。四。首。を。か。く。と。其。よ。を。う。く。う。な。く。め  
ト。よ。か。く。と。そ。ハ。ト。よ。か。書。か。く。と。其。よ。を。う。く。う。な。く。め  
の。文。よ。も。あ。く。う。と。用。じ。ね。う。と。本。性。を。せ。か。か。く。く。  
か。い。な。く。の。人。の。み。じ。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。  
歌。ハ。中。若。の。歌。で。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。  
う。

ゆふゆくよしゆくおゆす。ふゆくよなみゆき。  
又のいなぐく。ふも僅もよひて。財を蓄え  
まなむ。じゆくすまかす。かじとらぬす。ハ本  
意とくべ。機械カイナと。本かたがはす。が  
いあしてかひなむ。其流勢の似るよ。が得のひ  
て同一事せよ思へり。余りとも妙なつて。が  
せかとも多のねまく。れど、さうあへ。色もとふ  
しとほよ。人のねづかしよ。がのと前後  
も。色も多ある事。をあくとよめし。がてこかなら

アーハー。更にあんよ。あハラ、あくた。事  
ハあくーなど。あくづくもほひて。一  
きせよ福。をあめき。ハ様よと人を笑ふ笑  
んや。金の恥。あはまざる。お  
にじる

### 禍恋

タ放つよや。此の廢の。さよ。あてひかふ。やくわ  
先云恋を木底よ。ひのきの根をあへ。後拾送よみ  
えしも梅かばよ。但ひかよ。おあへ。がくわすよ

休云。やとよりは例あんれど。後拾遺はふる事邪。又古  
事も古事記傳承と考へ。云がアラマエトモアリ。

游志

おひは木のまきほひ肉のあぬしまよりおきよ毛  
お木のまきほひとお車のまくわがそなぬ  
いひさす木のまくわいひの木のまきなうせの

まことのうへ

休む。おのづかし。ひまわりのまほら。かへりて。西日暮。  
朝。やあらはうじ。毒蛇のぬく。悪さう。おぼえのゆき。おね

取ては。かへりまどハ被ておひぎ一なと。いふも付  
の。の。

### 醜恋

おまのが。の。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。  
おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。

おま

休ふ。おまを。おまを。おまを。おまを。おまを。  
おまを。おまを。おまを。おまを。おまを。おまを。おまを。一  
くた。おまを。おまを。おまを。おまを。おまを。おまを。おまを。

大又 十

おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。  
おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。  
おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。

歌あら

おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。  
おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。  
おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。

休ふ。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。おまの。

やうへんまへ強き行ひの間は。おまえの娘で、おまえの娘で。  
つづひな

處のてあやめ船もひきうちま繕のちあがむかす。休  
やえ云霞のきへふ國は、あよこうちそくのをと。志  
繁のきあまのれど有ても、あたしの大きさよゆく  
うなづて、都國のあよきうひゆくあらわはよて、う  
た。是を以て波風じのきへスのまほくはあらひのと  
すをぬれば、ま風のきはあらひの事なりとも

まよひのあはれをいふてまゆのまよ

大文書 四十二

役のせよよも入らむかひよし。あらな便れまつて君  
やくふゆく。つまゆ徳徳なりのこかひあはーみる  
じやかひわらひくや

体えよやの復。可や文もじひあはり。徳徳とお  
てハリのそよん。アホーの復。ひきうびの  
あひくや。ひまどとくへきをひきうび。あーく  
毎すきをはり。アホーの復。おとくへ  
何事なまくか。おとくへ。おとくをひきうび  
のひきうび。おとくをひきうび。おとくをひきうび。

第6章

大メサ四十三

ぬまんべ思ひよ入るのあらかうトト木の下トト  
家云何よねる。おおト木の下トト家云何よねる  
体えよ。おおト木の下トト家云何よねる。樹ト木の下トト  
よや。遠東の場所あらか。おおト木の下トト家云何よねる  
なだらか。おおト木の下トト家云何よねる。おおト木の下トト

二二九

鶴

河舟のぬめよみの船をひよせとひよせとひよせとひよせとひよせと

鶴

大雪に飛ひちのふてお羽はまほりてぬありせらり

え云。飛鳥よし角一

休云。飛鳥よし角一。拂きよへてる。ばはり。かく。拂  
さる。其いはく。のうんを。思ふ角一

迷懷

いはく。思ひのあはれ。かく。あはれ。萬葉。ま世。はれ。氣

え云。まよひ。あはれ。あはれ。せ念也

休云。迷事。無。無。無。無也

大又甲 四十四

寄園。每常

消えんも。あはれ。と遠の志。かへり。と。秋風のかへり。かへん  
えええ。の。字。おも。一

休云。迷事。つ。な。り。も。想。一。そ。や。と。お。畫。損。あ。ん

め。思ひ。よ。た。む。り。な。う。そ。う。お。考。の。小。路。た。中。將。の。思。より。来  
とい。酒。よ。う。く。れ。く。や。捨。角。一

數。あ。み。い。き。わ。く。せ。う。ま。や。の。せ。と。あ。か。ひ。う。す。ま。る。な。れ

酒。返。一

なへかぬとやがひくの木を以てまつ籠また溝とをあ  
ふえ云承女のふるむとて縷をまわすとまの  
まわらゆるはよとておのれなつてあくね、とてた  
休云ねとあふるを。とての調。とくよや今うほひあ  
きくれど。すなはじゆの調もあくね。かくゆのりた  
ろばかなよ。は更よとてめぐらすとす。  
ひふ。やひも更よとてめぐらすと。其の木と。其の木と引ひを  
あそぶ。ふきに始てけられ。其調の尋常ならん  
や。まくわびまも。つまむかへめじくのなす事とも。

ひ調をとむべ。つまむかへめじくのなす事とも。  
おえなりとも。今用ふう。は。調の。おへやる。す。忽ちあす  
とはあへやる。せ。は。俗言ありとも。調とのふくは。題云  
となりて。古奇の婆。は。題さうやの。が。そ。お。題。ま。六調  
あまへ。す。調な。八。は。お。ま。く。す。お。せ。れ。ま。り。調。の。称  
せ。こ。ハ。詠。ま。の。こ。な。く。は。お。ま。く。す。お。せ。れ。ま。り。調。の。称  
あ。お。か。か。で。い。す。お。ま。優。劣。を。ま。る。の。故。よ。其。寝。殿。一。ら  
を。あ。い。き。く。み。の。う。事。な。ま。せ。う。せ。せ。一。

誠拙せ。れ。約。母。忌。は。奇。あ。ま。い。よ。み。く。み。く。う。中。は

何うのあひて教も宣へへとすぬぬをあーおおえ  
ま云おもほひのじよなぬかとねりてど何のたゞ  
もせじとあへ

休ふ。此とすぬぬね。し禪師と。仰とかよて送られ  
る。本來むす一物なへは。また性をありますも。  
やうる事を漫ぐりんや。かはいを傳あらんと思へろハ。あ  
すやまをさだ

或人こまくとなりそ。おのまよ。すひと。おこつて  
まくつた。のじすを額はあてなへ。やのそもあらへか

アモ歎となん

おちれあひの遠と。も思ひ。もあがまひ。あもれのうへなり  
ふと云ふおこじ。おこじは。おこじは。おこじぬせ

休ふ。たしかあひ度。仰の東の口を覗き。あひ古文者の方  
詮一おこせ。十ヶ條の因だ一つの口も。其の口の仰の唇  
つよかく。吉今比文をよく見立て。のやかをやとふを  
い。其がをとひにとも。謂のうは。おこじも。おこ  
せじも。通音ます。せじ。まん。行車のあん。運や天の下。お  
こむてつぶ娘をみんや。かくても謂のたまへこづあ

らぬ。せりあひのつゝをむかへ。文輝の優劣。辨後を  
さく矣す。今古よりもと今へ無づ。其體徳の者  
あ先ハ。ひよき御のとよもと。わやもあつて。天賦の  
自然よも。私よりんをもまゆるは既さう也。さうハ古  
儀すて今幾あるものあり。今儀すて古(歴)ありもの有  
ヤ。古(歴)なうんよハ古(歴)よ邊。今歴なうんよハ今よ邊  
し。ふうれ言を知り本すて。星を擇ふを辭へと。すと  
もり大小種々のとこりめあうて。たよすよめハ。今古より  
うちて。勧く地をせんじに。ふすて。君よりの。けよ邊

ひて移す。すりきを済(さん)や。おのき其種よもをやと  
ハ。今此種あひを取るの多く。古(歴)儀たりを捨てやれが  
う。古人の文輝よもくや。此第り。さうハ御のあへに伝  
ひく。此儀もく跡。今古よりひよ邊り。大や。すよ言ま  
らす。古の多かハ。や。より禮云れ道ハ。一大諸物すと。  
變化寛りなくもだせ。壁(かべ)にて星をぼくねり。一ハ何  
そ。謂也。謂ハ。誠乃。大や。すよ言ひ。近よを實と見て。遠よ  
を遠。物の遠よをかう作て。近よを捨て。五よ北也  
つ。五よ。れも。したの通思ひ。と古昔なも病めり。次や

一宣教戒格を守り聲またまく。捨ちよあらんと。され  
へり。星はもとて星をやすき。必其傍もとく。すなむと  
も。今れ候あらと。れにかん。やつてはある。登喜院の  
よがより。慈葉福す。時の文よ。おこきよとまきる  
やうなる。せかも。今れ候を用ひ。かの年といふ  
時のように。よほ後が生ずるやう。もやまくある也。是れ  
や。も御のいやひあるよ。もよもよと。もよもよと。もよ  
かく書かれて。其よもよと。もよもよと。もよもよと。其を  
ちめ自然とあつた。万々が。ふきのゆかゆく。て。滋味

をも。謂の種儀。かば。助婢の活法を。あるよ。近づん。は端  
あすり鷗岐よ。らそ。けまなと。や。知つ。よなう。ね。さひ  
よ。じ。の。際。役を。せうして。天ト古文。は詠め。聲の。憲ひ  
を細んとす。七微志也

## 大文四四九

落ふるもひろきぬ声を。余と。捨す。叔の心あらう。兼  
ふそ。云う。の。匂。の。匂は。ぬ。お。難。一

体えよ。ト貫。お難。一。何事とも。あらぬ。と。傷。の。便  
ふ。心を思ひ。や。捨ふ。申せ。又。う。捨め。捨ひぬ。申せ。を

といふるハ難能せりとてかくもなるべ。凡手を捨てよ里  
と擇ふるハせめては取れ意地也。ある事印す大内世  
よ邊の人のへど捨てなき。お捨ひゆるんぢまわるよ  
のやく思さん。其の心も人え。御せを念とひのそ  
捨てんと。まことに必捨ふ。す御世を捨てぬ御せ。御  
をあつて。いはきく。おおなれのまじひ也

### 尉と姥の二三

相生のサトモあく索浦をみて。みせのすこと御まくを危  
え云うがほのひろあとあひじめのやうにと古た御

「も又あまく六相生は、あくとお老あらじまうべ  
休ム。お生をお老ならんじて。東麻呂乃役も。其  
師役を失。困ふせやく。何れおやうじまわる也。おさ  
お寝をなす事。古と云義の所よおこしむけり。書邊  
口よせつあく。からせり。ばおと見るべ

### 末廣より猿樂の圖

「のをあかへん。おもひだすか。たるあめ代つけ  
お云猿樂の詞をよへ。うなづかぬれどもあやのま

休云。四百種やうなまくにとひ。おも。何んのまふ耳なれぬ事  
あり。まよひ思へ方也。

同人之類

あらうひめゆりたちもまた今ふ敵のうへまほ  
おこひにいれきよひくはあくさかり  
体へすみのゆとりひる。其まゝのうへまほたれ  
まのじきをぬが、せわかうのまへん。せわだるやうにひ  
まく。其がくつまほか。其まゝのうへまほゆせりまほいまく  
そくまほういかがくちあやまほく

秋の夕暮れに女の囁聲や夕暮れよらせん萬

まゝやうよたまもひはれ高さむれづれとあらす  
立て小所かとといひもくらうはをきわ  
波よばくもあらすとくもあくみ、とくづ  
休ふ。せハキサのとをかくと。やよよのひのけとつをきよ  
てあり休えゆく。あはあん。より波を來てみよ。山鶴  
體もせよ在り。首ハシモトのゆく。花やまよそひくよ  
く。せよ共にうひおもひ。其根神のぬあなづい。裏  
よ無事をやへす也。苦ハ花すもあらざるよ。

其の如く解て爲ふを爲ん。画の如きやああり。又松が  
一枝の如く。さうの通り下の間は。おもつて置かれて、  
おもつて外なる身どもが。作者もあれぬ。自然  
の妙用也。古の秀才の筆の力也。然る處を小所の古  
事かと。思ふ。何の筆か。笑ひ。すなり。よし。まよ小  
所の古事。なほも。よし。よし。事。みのりもん。お  
のの古事。なほも。よし。よし。よし。歌詠の常也。  
義理も。おもて。歌も。筆も。筆も。筆も。筆も。歌も。歌も。  
うしなむ。うしなむ。歌も。歌も。歌も。歌も。歌も。

仙城は遊んで。じうの山を。従う。俗世のせ事をして。  
名利は耽り。また。の。あう。よ。の。よ。ハ。あ。い。今。も  
造物者。え。わ。の。化。な。い。ひ。居。せ。る。其。あ。な。め。く。の  
う。あ。な。る。お。う。だ。な。う。な。う。や。は。せ。め。う。お。う。  
や。す。や。せ。い。お。う。な。う。な。う。行。事。の。あ。ん。居。ち  
居。居。居。居。居。居。お。お。休。前。は。一。ま。の。人。ハ。擇。の。一  
う。ま。ま。の。休。前。は。一。ま。の。人。ハ。擇。の。一  
も。教。の。因。ハ。た。か。の。休。前。は。一。ま。の。人。ハ。擇。の。一

根うす裏ひ絆ゆゑまきとせば。ほく井の麻木がむの聲  
う。翁ゆゑまきの鶴の声くば。然、いやのむ蓑曳れ考。が  
とい。や。旅あそびて行く。おのる鄰じの。のれい事  
をよめん。すと。着にいよまめん。いよまめんの皆す人の  
寝かか。其が舟ねじめ。伊勢源氏の鄰ひ。や。も  
あわゆる。化り替のなめん。いよまめんのあらじ  
えん。がくは。おまくは。故車。おたぬ。あらじあらじ  
まほせ。いよまめん。甚かめん。おまくは。いよまめん  
生まねのやうの魔がふ

よもよもよもよも。見なの木のよじて。よがく。よも  
よも。よも。よも。よも。よも。よも。よも。よも。  
体ふかき。よも。よも。よも。よも。よも。よも。よも。  
人そぞそ。よも。よも。よも。よも。よも。よも。よも。  
よも。よも。よも。よも。よも。よも。よも。よも。  
よも。よも。よも。よも。よも。よも。よも。よも。  
よも。よも。よも。よも。よも。よも。よも。よも。

蝶戀花詞譜圖

花のさはれり故ちや葉かなふ天なめにせば秋の  
あたひ意のいふ事よあんじは秋のせうとわを  
ぬ。下かぢくは、君のすきにあらわす  
休。」。其音が、そぞろ音。續ひある。而之又  
さことにあむ。ゆがて、てあひゆるまん。何事のゆく  
こと。おもに思ひに拂ひぬ。ゆくゆくは、あらへ  
ど。心却せぬ。下

大文升五十三

かまくら。こゝにあむ事なまゆきありよ。場あきや人の事。  
まちまちなふうが。はあがまがまにあづひと。あづき  
ちとまつらのひよりまきのね。おもて今ハあめすをやくよ  
ゑて書けろ

捕うめつけめなまきじめあらを重ねてみなまん  
光云をりとく方ようじをひよりれね者あり  
体云錦織の身、者作といへば考あるて。ふるの  
なりをりとあん事。まよあすまよあす。春海の  
波よりと思つたものか又され。波がくせ考も附合の

安流なり。一。おハ音師古文を考へて考へたるを  
きく。かくあり。ほおとひづ

### 涅槃會

世中おそれのあゝはまやひきそ一筋アセラ志の毛枕  
笑ふのゆきよひきまく  
体ふのへりはまく大國。信ふのひかく。おまえよ。又  
えぐれ事なれば。おまえよ。信ふゆきひ捨(寒  
かき)れ。ゆきよ。ひかく。おまえよ。又。信ふゆ  
りひなゆかば。おまえかんじゆ思(おも)ふ。おまえの信ふ

大正廿年

ハジ御おまけに。おまえに。おまえに。おまえに  
あり。みやひきのひきそ。おまえがむてのひきそ。おま  
えハ。活(タリ)え考(タリ)え。考(タリ)え。おまえ  
高便(タリ)て。やつて。おまえとおまえ  
うすり一車(タリ)て。おまえとおまえ。即(タリ)て。おまえとおまえ  
の車(タリ)。おまえとおまえ。おまえとおまえ。おまえとおまえ。  
其(タリ)のひきそ。おまえとおまえ。おまえとおまえ。  
花(タリ)の上(タリ)。おまえとおまえ。おまえとおまえ。

あはははははの里のぬまん波の浦をあみあむりや  
老ふ花鳥とひに畫なとがひーおーとひにや  
一よよけをまじ

休云。改畫なつや。とおもひよ。かまほの例の  
秘訣の極なつて。ひづきを知ら。謂のなまくらをかひま  
へかひ。あちまな。おーおまへ既よ矣を

世鏡直貞のふよ。森の寢一たまはる。えぬよ。よひて墨

一けら

あやよめうきよか森のハ前ひかゆつてなま

大メサ辛五

老ふ花鳥とひに画

休云。改画なつて。ひづきを知ら。謂のなまくらを

絵秋薄

老ふ花鳥とひに画の也。唐ひせんとくわたり秋歌  
休云。改画なつて。ひづきを知ら。謂のなまくらを  
ゆめあひだら。思ひぬか。なまくらをかすくもあら  
ゆだときハ少の句をいれどつてもあら

休云。おーは寝のふよ。身せうか。今も同格。そんに  
せんか。すんか。うよせんか。思ひ。などひ。おも。調は

まことに。其のまゝ。枝垂れたり今。ちるん。  
くよひの朝。枝の下をさん。今。よみがへり。捨てたる。  
な。あも奉ろに。ま。あも全く。あつまは。あれ。  
せかくさんや。世守め。紫おふや。ば。あわよトウ。て。うら  
され。か。よき。う。枝垂れの。武。よ想。ま。よあ。ま。よ。味  
ひく。れ。よ。す。あ。す。ま。き。

神祇

神ハなむ御代わがみれとのたをおひまとうやく  
え、お何を思ふなますゆう  
あはすん

休云。天の下を押す者。されど也。凡て  
一ハ箱の蓋を宝く珍る事。お内閣を立つ事  
也。ひまハ。箱の蓋を宝く。其箱の肉を珍る事  
も。とは。えあくらぬなり。

### 寄月祝

大君の美世すらのあづか。月桂枝のうきへん  
お云ふに。よし。事をこじ。更にあむすら  
休云。拂歌ハ。わせ。かす。詞。かす。い。事。を。せ。が。よ。う。  
に。あ。み。し。と。う。て。る。ハ。何。の。事。ア。リ。ハ。じ。か。す。ド。お。ま。う。

大又サニナセ

角るな。山や。さき登む。まき。の。葉。や。よ。が。ま。入  
ハ。心。や。な。う。ゆ。き。思。ふ。ハ。往。を。思。ふ。あ。う。ん。の。歎。を。  
は。更。よ。や。ま。の。ま。く。る。也。ア。リ。く。角。

### 歌あくら

毛。あ。ん。と。ほ。お。も。ま。く。の。ろ。約。大。く。の。ま。春。れ。日。乃。朝  
榮。花。よ。嬌。も。こ。れ。く。歌。ふ。ま。ん。猶。貴。代。里。の。春。の。夕。暮

休。云。此。い。て。は。今。の。せ。よ。の。ま。れ。す。伏。と。そ。い  
毛。あ。く。

休。云。す。無。く。せ。ま。ハ。家。集。の。体。を。每。せ。か。歌。つ。つ。よ。

とくに今よせの詞あまし。おこなはすかよ思へる也。大  
きなあを考のせれど、ひ葉花は燐も角もれて  
病氣もんまと。侵はせり。調を。歌歌賦とすれ  
から。余りなり。實せり。れどおおせく。おこまこ  
となく。意濃く。佻薄テイボク。まきふせ。或人幽葉ランをう  
きるに。花あら事をあら。苔れいまくせ。痴也。と思  
ひす。す。まやまやと見る。竟よ。花香をあら  
とい。海や。ほほ。奇の佳調をあまは。ほく取もる。  
ひくのくはくのくはく

大升幸大

卯花のあらゆるの。其のそが雪のわせをやふせり  
やふふ雪れ中のもののかへんじくをばくとく  
よみくわくとくとく

体ふ。こくある。おせり。せせと。雪かのそぐふとくと  
く。おとづれ。すかのとくとく。おとづれ。おとづれ  
と古今序よ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ  
ん。とある。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ  
おとづれ。おとづれ。身の。おとづれ。身の。おとづれ。身の。おとづれ  
まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく

体云。おとづれ事々へ考へあがめの也。其よもや考へよつま  
し。想ふるひあへてか。更に我後必其考へあらむ。世  
のやがてあるべし。外物のあはれゆゑの故也。せまじく  
おとづれ。おとづれ。考へあがめのハ。おとづれ。おとづれ  
おとづれ。考へあがめの也。

唐一の説の種をそんじ黒拂らゐゆのまほなういのも

考へあがめの唐流と思はむ。されば、あがめなど

とづれ

体云。おとづれ。唐風の考へあがめ。入道を含り

大ニサキナ

かく考へて。おとづれ。金の事。金の事。金の事。金の事。  
すとづれ。又ハ考へて。金の事。金の事。金の事。金の事。  
あり難い。一金つぱに。おとづれ。金の事。金の事。金の事。  
とづれ。おとづれ。又。例のひり

とづれ

蓮葉の二郎をひく。思ひのうづき。おとづれ。おとづれ

やえふ。一音。おとづれ。のと

体云。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ

おとづれ。おとづれ。彼行とも酒たゞく。おとづれ。おとづれ

かくもう萬事ひきおのとすむか一風も鳥追ふもあ  
かえふ他情の如をも

休云。すゞ。すまほ。肩の。せひ。夙も。鳥の。を  
うな。腰か。身か。まつ。ハ。ぬ。仰。宿。休。か。と。  
あよ。こ。ほ。ゆ。打。き。の。ゆ。カ。葉。よ。殊。宿。者。不。寐。  
哉。な。と。い。ひ。字。射。波。来。壁。と。も。あ。ま。と。う。腹。よ。肩。寐。成。  
も。鳥。か。い。す。よ。古。れ。ハ。仰。宿。よ。ハ。入。角。よ。を。く。  
と思。つ。お。心。を。

すく海の市場へつよひ立あら

まへすれども  
はるかにあそび  
まへすれども

其の事はあらゆる

体え。ひじきの味を。あらはるはい。雷と風に。ま  
と。な。おもひひかね。せまひかね。おもひ。  
ほれ、おきひかね。さて其こゑと。今まくは  
つるて。双ふのよハモハモはるまか。ま  
あくす。おまのきの養ます。のせり。おとす。  
おとす。のせり。おとす。おとす。おとす。  
おとす。おとす。おとす。おとす。

。まづはよ徳清さん。の處へ渡すも、運ひのう。  
わざりにかくふれど何をこなすかよあら

おまえひきよしのまつりのゆゑに  
おまえひきよしのまつりのゆゑに

体云。敢あはれん。能猪寺也。

あらすじよはれ（あま）常のひをもねを思ひ教な  
能はむと折りつゝておき坂社よたすくハ人のごめうすより  
おこす（常坂社たゞハ余りよ今ゆふよも

大の事あるべからずも、かくのじゆうひ人あ  
るて心地持すむべからずも、信おほひやうにし  
てあめなすまよ幸いは

休云。君の子を懷へよ。徳ありとて。君をもすまく  
事。徳有。徳有よ。ひなう。徳有。徳有。徳有。  
あら。思ひひの。徳有。徳有。徳有。徳有。徳有。  
徳有。徳有。徳有。徳有。徳有。徳有。徳有。  
徳有。徳有。徳有。徳有。徳有。徳有。徳有。  
徳有。徳有。徳有。徳有。徳有。徳有。徳有。

ふたすと一鏡の西を就かむと。其やと御おれわらうき  
かえふこれも佩譜なまくも

休云。ちよう佩譜がすと。すみの。がよひだ。が。物せ  
きはあおと。みのと。ゆめ。すみ。が。あ。も。か。す。も  
お。か。う。と。な。ん。か。る。を。ほ。ま。や。か。く。だ。ま。く。さ。の  
お。か。う。は。古。集。の。意。つ。て。冰。や。の。な。ち。あ。の。う。か。の。を。  
終。只。一。云。ま。る。と。佩。と。なり。佩。と。か。か。か。か。の。も。と。さ  
る。ハ。已。達。の。眼。か。て。ハ。ア。キ。キ。ア。シ。カ。シ。ツ。ル。と。ま  
の。故。よ。古。今。集。の。佩。譜。な。と。ア。リ。意。況。す。ま。く。や

て。先哲も思ひ惑も。きに。紙も。若師の。正義也。出。人。  
千載の。綾冰。一寸。解。人。其。春。を。待。一。か。い。ハ。古。中。の。佩。と  
し。更。よ。こ。の。な。み。ハ。佩。譜。が。ま。く。か。う。が。モ。ア。モ  
よ。ア。ル。モ。ア。ル。そ。ぐ。か。ん。ア。キ。モ。二。事。の。と。を。妨。く。ア。モ  
吸。も。ほ。人。其。き。と。も。す。そ。ぐ。佩。譜。が。す。ま。ん。と。ま  
ご。も。熱。ひ。き。ほ。ま。な。と。其。往。か。り。う。り。さ。う。か。う。じ。を  
ち。の。お。も。お。ひ。か。り。て。ま。し。佩。の。佩。と。事。を。あ。も。も。  
か。の。お。も。お。ひ。か。り。て。ま。し。佩。の。佩。と。事。を。あ。も。も。  
ハ。せ。ん。か。に。か。か。く。我。あ。り。と。も。活。字。す。と。お。れ。本

意をもたらす。ひつじに火をあたえよ。おはなとおはな  
むなとおはな。ひつじの火。おはなはあたへよ。おは  
なもあたへよ。おはな。おはなはあたへよ。おは  
なもあたへよ。おはな。おはなはあたへよ。

波多歎川なり。殿求法師在世のせ。鳥も鳴らず。皆たの  
心もあり難む。今まうれ面圓志の追善は。あくまど  
歌をかくて。あら人らずめによもと歩けり。

矣云母ノムトモアヘテ

史記集夏のす七十卷のす八十首のす八十首のせまき  
トを北漢すよひりて六九十四年をかへあらわすと  
古より北漢のむ北漢有ハ數あるべからず

此義ハ一をゆくもよと聞ひゆるを以て本性とせ  
らまつまゝは俳諧なみ放つもとすれば餘のぎを  
うよめぬれなるがあつてゐる人のがよひつむと  
きゆともつてはまくとせりたゞてこそふろくくお  
とゆくゑにそむつあるをむ事へく  
休云夏をのじより俳諧の比數もよしむとて何との  
物くづよ。古集比例を引くま事くハヤニ例をひく。  
既は古今集ハ夏ニ二十首余。冬ニ二十首余。俳  
諧ハ六十首はなんくとて夏冬は合せてハ其数倍也

也。さへ紀氏も俳諧を心とせられんハ。老師も増りて  
詠くづく。かくやくのむよ廢めもとては實をひくハ歌  
よすむへとれきと。被もつゆぬ

天保のとせれ月廿日よ志るす

香川景樹大人著述

新學異見

六十四番歌結

うべ歩

大人判歌結

中空乃日記

百首異見

桂園一枝

大人歌集

古今集正義

土佐日記創見

萬葉集據解

活言考

五冊

五冊

三冊

三冊

三冊

三冊

三冊

三冊

三冊

既刻

同

同

同

同

同

近刻

同

同

皇都書肆 河南儀兵衛

天保五年甲午秋發行

江戸 日本橋通壹丁目湊原屋茂兵衛

大坂 心齋橋通安堂寺町秋田屋太右衛門

皇都 三條通高倉東又出雲寺文治郎

河南 儀兵衛寺町通三條上ル

弘所書林

